

# 生駒市学校教育のあり方検討委員会教育環境向上部会 平成30年度第2回会議 議事録

日 時 平成30年8月29日（水）9時30分～  
場 所 生駒市役所 401・402会議室

## 出席者

委 員 5名（樋口部会長、松嶋委員、高島委員、伊藤委員、川上委員）  
事務局 6名（真銅部長、吉川次長、辻中課長、城野課長、滝澤課長補佐、  
牧井係員）

## 1 案件

（1）教職員の働き方改革に関するワークショップの結果概要について  
事務局（働き方改革に関するワークショップの結果概要について、事務局  
から説明）

部会長 よいワークショップであった。人手を増やしてほしいといった短絡的ではなく、自分たちは何ができるかといった現実的なとらえ方をしていた。改革を進めるにあたり大きな資料となる。質問、意見はないか。

委 員 自分たちとしてできることが出たワークショップであった。勤務時間、業務についての内容が具体的に出されており、今後の働き方改革を進めるにあたり必要なものが見えてきた。

委 員 先生方は、ワークショップを意識した言葉を使っていた。管理職が参加しているところもあり、言い尽くしてはいないだろう。また、全職員の意見を反映しているかは疑問である。

部会長 学校全体を考える立場の先生方が多く、多少配慮した発言があった。しかし、職員自身が変わっていかなければならないことを踏まえ、行政、学校は何ができるかを考え、また、小学校中学校の課題が違っていることを押さえ整理していく必要があると感じた。ほかの方、意見はないか。

部会長 資料は、生駒市としてのものができているので参考にしていきたい。続いて、教職員アンケート・ワークショップ等を踏まえた課題の整理について事務局から願います。

(2) 教職員アンケート・ワークショップ等を踏まえた課題の整理について  
事務局（職員アンケート・ワークショップ等を踏まえた課題の整理について、事務局から説明）

部会長 ICT の活用事例を説明いただいた。ワークショップの中でも ICT の活用が出ていた。改革の期待に応えられるものである。資料 2 について何かないか。

部会長 生駒市は ICT 化を進めている状況である。パソコンが古いため処理が遅いという意見があった。新しいものと思うがどうか。

委 員 パソコンを含め、校務支援システムについて具体的にどのように進んでいるか。

事務局 当初、モデル校は 2 学期の中頃より実施の予定であったが、システムの入札が遅れているため、3 学期より実施になると思われる。

部会長 県レベルで進むのですか。

事務局 県のクラウドと市が接続して実施する。

部会長 パソコンを苦にする人はいないとは思いますが、苦にする人はいないか。

委 員 いないと思う。

部会長 業務の効率化という点では、よい方向性だと思う。指導要録は、パソコン打ちか。

委 員 やっているところもある。

部会長 学校ごとの取り組みだろうか。こういったものも含めて、一斉にできるということか。

委 員 県のクラウドで整理する。市のものは、それとは別のものか。

部会長 つなぐことで一つになるということか。

事務局 例えば、高校受験に関するデータを共有するといったことが可能となる。ただ、容量の大小があるためパスワードの使用やデータの入れ替え等の作業は必要になる。

部会長 県内でサイボウズのようなものを導入しているところはどれぐらいあるか。

事務局 奈良市が実施している。県全体として、あまり多くはない。

部会長 では、資料２については終わる。  
前は、働き方改革について意見を伺った。事務局で議事録をまとめているが、意味合いとして違ったところがある。

事務局 議事録については後日メールにて送付するので訂正等は、メールで送り返していただければと思う。

部会長 訂正部分は、メールにて送るということをお願いする。  
第１回では、ワークショップに関連する内容もあった。現場の忙しさへの共感、国や社会における働き方改革の動きに合わせ変わるチャンスのため前向きに捉える、課題を踏まえながら進めていくということであった。また、仕事量や時期、特殊性、職人気質、緊急対応など様々な角度から意見がでたが方向性を探っていきたい。前回お願いしていたポイントを出しながら整理していきたい。  
整理の仕方としては、一つ目は、長期的展望、中期的展望、すぐにできるものといった整理の仕方。二つ目は、システムとして何ができるか。三つめは、行政としてできること。四つ目は、国レベルでできること。  
最後に、懸念することをまとめるとともに、委員のポイントを整理する。そして、焦点を絞っていく方向性でよいか。

部会長 現実的な問題として教師の意識が出来上がらないと進めない。意識を変えるにあたり、教師像まで考えると深くなりすぎ進みにくくなることを踏まえ進めていかなければならない。まず、委員の先生方が考えているものを出し、振り分けていきたい。

委員 1点目は、勤務時間の管理を個々でやっていくべき。定時退勤の設定を学校独自でなく、生駒市全体で考えるのがよい。部活の休養日も含め具体的に進めていければと思う。また、長時間働くことがよい先生であるという意識を変える必要がある。

2点目。こだわりを捨てる。業務改善という観点より例年行っていた取り組み、行事を見直し必要かどうかを検討する。時間がかかる教材研究はICTを活用し、情報の共有化を図ることで時間短縮になるのではないか。

3点目は外部人材の活用。部活支援といった人材など地域の協力活用が一つの鍵となる。

最後に、保護者、地域の理解を学校だけでは難しい。どのように広めて（求めて）いくかといったことも考える必要がある。

部会長 行政的な面で進めることや、人的支援として何が必要なのかを考える必要がある。

委員 学校閉庁日はよい取り組みだと思うが、地域へお知らせをして理解してもらう必要がある。今後、水曜日の時間の取り方などを徹底周知するために生駒市全体でお願いする。

新聞にあり方検討委員会が出ていたが、検討の途中ではあるが取り組みの具体性が欠けていると感じた。クラブの在り方に関して、国の予算が出るようだが、うまく運用できるのか。他に、勤務時間に関して、一斉に退勤できるようなシステムはあるのか。

事務局 電源を落とすことは可能である。また、画面にメッセージを出すこともできる。

委員 クラウド導入もいいことだと思うし、先生方がパソコンを扱えることもすごい。だからこそ、ICT化を進めることもいいことだと思う。

部会長 人材の確保や電源を落とすことは現場としては難しいところがある。会社では電源を落とすことはできるが、教育現場では実態に沿わない。ここが、特殊性である。

委員 この部会に小学校の先生が入っていないのはどうしてか。

部会長 必要に応じて、お願いすることもあるかもしれない。

かなり、ワークショップでは、小学校中学校の課題はニュアンスが違うように思った。

委員 小学校は、英語が入ることで学校も子どももしんどさが今までとは違う。英語が嫌いな子が、勉強嫌いな子へと増えている現状がある。改革を出されるのはいいが、現場は昭和の時代に比べるとはるかにしんどく、今の方がストレスを抱えている。教材研究の時間や生徒とのかかわりは昔のほうができたのではないか。例えば、ドクターは一人当たりの仕事量や事務処理が多く、さらに説明責任もある。そういったこともあり顔を見ずに画面を見て診察をしている。似たようなことが教育現場でもある。保護者対応にかかる時間が増えていることもあり、生徒との対応では話を聞くのではなく、教師主導で聞き進めてしまう現状がある。仕事量という点で人が足りないと思うときがある。それは、児童生徒にあった学力保障をしたいと思うが、実際は少ない教師で生徒に対応しているとき。また、社会から求められているものや新しい課題に対応したくてもできないときである。こういったことを踏まえて、働き方改革を進めていただきたい。

部会長 ワークショップで感じたが、小学校の方が保護者対応に対してストレスを感じているのではないか。それは、要望が細かいだけに、クレームも細かい。ICT化で効率化を進める点はよい。しかし、自然に目が入るものではないのでチェック機能が働くのかと危惧する。英語導入は、身構えてしまう。小学生ぐらいとは思ってしまうがなかなか難しいところがある。

委員 幼稚園では、小学校で英語が始まるということで、幼児から英語に慣れ親しむ方がいいのではという意識を持っている。ボランティアで英語活動をされている方がいる。この方は、幼稚園に行くのが楽しいと言っている。子どもたちもボランティアの方とスーッと英語に慣れ親しんでいるということを聞いている。

部会長 私学では幼児教育として英語教育を取り入れているところがある。幼児の年代は吸収力もある。幼児のうちにという考えは大切だとは思いますが、継続されなければならないという課題がある。

委員 親の立場として、子どもは毎日楽しく過ごしている。こういう形

を維持するために、また、先生方の仕事が重くなりストレスを感じているなら改革は進める必要がある。現実、子どものことを考え一人一人に対応しているため仕事も多くなりやりすぎているように見える。その上で、改革を進めるには、会社でいう管理職によるマネジメントが大切である。そのために、ICT 機能に登録し、出退勤時刻の管理をきちんとすることを徹底していかなければと思う。

方向性として、先生方は学級運営を一切行っているため、学校事務をサポートする方法ことが検討課題である。軽減に向け、教師がやるべきことを見直し、マネジメントをする上で勤務時間や持ち帰りの仕事内容を把握する必要もあるのではないかと。

部活の負担では、いい成績を出そうとすると管理運営（費用・時間）が大変になるため、教師以外が担うことができるものがあるかもしれない。全体的な顧問は教師が行い、実技指導は外部の人材を活用する。

学校運営に対する協力では、社会全体で働き方改革の議論が進んでいるため、定時に帰り家庭で過ごす方や休日をとる方が増える。すると、学校活動に参加できる方が増えるのではと思う。

民間では、成果を計るために数値目標を設定している。こういった目標や成果どう押さえを考えていくのが大切である。

部会長 教師としての成果をどうとらえるかは難しい。数値で計ることは難しく、また、10 年後に成果として出るかもしれない。

委 員 働き方改革の取り組みに対する成果を探っていくということ。

委 員 ICT 化が大切なのはわかっている。教師の仕事は、勉強を教えるということだけでなく、人間を育むということもあるのではないかと。義務教育では、人間を育むことの方が大きいように感じる。学校が担う業務ということですが、学校によっては地域や保護者と連携しているところが多いのでは。連携をとれている学校は保護者の方からの声かけがある。部活動では、保護者の方も連携の中心としてかかわっている。

部会長 働き方改革に向き合う中で、子どもを育むという視点から見ると矛盾を感じる。教師のこだわりとやりがいは表裏一体である。こだわりを省くとやりがいがそがれるのではと感じる。

部会長 まず、意識改革からスタートではないか。先生方によって捉え方や業務は異なる。しかし、意識を持つことから始めなければならない。これが自覚につながる。そのため、出退時間を明確にすることは、自分管理という意味で大事なのではないか。こういったことを含め教職員一人一人は何ができるか。出退時間の管理と自分の家庭を大切にする意識をもつことではないか。

日本の学校はすべてを引き受けている。外国では、家庭としてできることと学校としてできることがはっきりと線引きしている。

日本は、線引きがあいまいなところ（万引き指導など）がある。曖昧なところを学校は仕事としてとらえている。

意識改革について考えていきたい。早く帰らないといけないという意識はあるか

委 員 ないです。

部会長 一般の事務処理とは異なる面があるものの、効率よく仕事を仕上げて帰ろうという意識はあまり持たれていないのではないか。早く帰らないといけないと迫られている先生は条件があるので意識がある。子どもの手が離れている先生方はゆったりとした気持ちで行っているのではないか。そういう面で仕事は、時間内で納めることが良いという意識を持ち、帰れるときは帰るという意識を持つことが大事だと思うがどうか。

委 員 早く帰ろうと勧めるが先生方の目が冷たい。子どもとかかわりながら業務をやっているので長時間になる。効率化を進めるとその空いた時間が子どもと向き合う時間となる。これが本来の形ではないか。

やはり、自分の仕事を振り返ることが大事である。また、目標や成果数値を設定するのは難しいが、何時までには帰ろうといった目標、ストレスに関する数値を減らす。こういったことを考えられたらよい。

ストレスの内容は校種によって異なるが、現実には勤務時間が長いという実態がある。出退時間を明らかにすれば、仕事の見直しをしていこうという機会にもなる。

部会長 意識改革という面で、気持ちの切り替えもあるのでやりやすいがジレンマも含んでいる。意識を持つ上で自分管理の大事さ、タイムテーブルを意識し、仕事を整理することが身につけるべきもの

ではないか。

委 員 早く帰ることで自分の時間を持つことができ、この時間が大事である。この時間の大切さを社会全体が理解する必要がある。自分の時間の中で、新しい発見や自分を見つめることになる。この方が生産性につながるのではないかと思う。また、忙しいことを善と思わない雰囲気づくり。管理職からの「早く帰ってえらい！」の声かけは大きい。

部会長 私たち自身も意識改革が必要。どこかで教師像に縛られている。社会全体が変わってきているので、学校でも社会の流れを取り入れて整理する時期になっている。まずは踏み出しましょう。

委 員 こだわりはこだわりとして自分自身で持っているといい。意識改革は何を根本に据えて行えばよいのか。まずは、時間管理と出退時間でいいのではないか。

部会長 教師像に踏み込みすぎると違う面がでてきてしまうがワークショップは考える機会となり、意識を考えるための作用となった。代表者が学校へ持ち帰ったが還元できる状況ではないと思う。各学校でワークショップのような取り組みを持てればと思う。各学校で意識改革を行うようなワークショップはできないだろうか。

事務局 学校の中では、働き方改革の委員会を立ち上げる際に、今回のアンケート結果をいただけないかという問い合わせがあった。

委 員 まとめは、先生方に配布されないのでしょうか。

事務局 サイボウズに挙げるなどして何らかの形で広める。

委 員 行事を見直そうという提案があった。行事は減らすのではなく、中身を変えることで軽減を図っていく。仕事以外のことを考えることは大事であり、プラスになる。  
本来性のところが抜けていた点を確認できたのはよかった。

部会長 出退時間といった実態把握は、今後の働き方を考えるにあたり重要である。サイボウズでの管理はどうですか



部会長 本当の時間は測れないが目安はわかる。先生方を守るための時間管理として進めることができれば実態が出てくる。サイボウズでの管理は抵抗があるか。

委 員 修正しながらきっちり進められるもの。しかし、理解が進んでいない。

部会長 パソコンの具合など市で考えられるところは考え、取り入れられることはやってみる。サイボウズの習慣化は、今後の ICT 化を進める上でなじむ機会となる。まずは、出退時間の習慣化を図る。

事務局 早速検討していきたい。市の職員も導入の時はうまく進まない時もあった。今は、習慣化と共有ができています。

部会長 改革を進める上での懸念はいつもついて回っていた。これは、常にある。しかし、進められるものは進めていく。  
では、事務局からの連絡をお願いします。

事務局 連絡事項